

小田原史談

第43号

談目内 小田原一丁目 小田原市幸文 小田原市文 小田原市文 小田原市文

「崇りの榎塚」消える

浅見 霊風

肉身縁者から生還の願いを込めた霊頭あらたかな神仏の御守札を肌身につけて幾十万の若者が、戦地で散華して護国の鬼となり、一枚のお札を持たぬ無信仰者が元気で我が家に帰った。その実例を嫌という程知った戦後の信仰民族日本人が大東亜敗戦を過ぎてから一変「神仏頼むに足らず」と神社仏閣を単なる観光建築物としてのみ訪見する様になったのは、時代の流れとはいえ無理からぬことである。果してそうならば、大河の洪水の如く勃興した新興宗教？団はどう解釈すべきであろうか。自己の無力を何物かの力に頼って生きねばならない人間の弱さ、他刀本願の根は広島、長崎の原子爆弾では滅亡しな

か

った。これがまだ生きていた。迷信ではあるまいか。如何に年歴から干支を除き九星を排し、六曜中段七曜二十八宿下段の吉凶解を断りし、納言の易説を排除しても、鳥獣魚虫と同じ様に、或は全身覆毛の原始人的生活には成り得ないだろう。未だ迷信は生きています。この迷信の対照として畏敬されて来た「崇りの榎塚」が飯泉から一つ消えることになった。嬉しいことだが幾分の郷愁を含むので、この塚への供養の心持ちで書いて見ようと思う。勿論専門家の研究もなし、古老からの話し伝えと、私達史談会員の推論とを纏めただけのものであることは云う迄もない。

消えた！ というのは新

飯泉橋から飯泉南部を新泉道が出来、飯泉から国府津間の順礼街道が拡張され新市道となって面目を一新したのが一昨年のこと、今春三月この接續点から松田への新泉道工事が開始された接續点から約三百米の所（星野茂所有地で珍らしい無番地）にあった八坪程の土盛塚がこの榎塚で全部が原道敷になったので消えたのである。

この土盛塚には直径三十厘米位の古榎があって、外には雑木生い繁り誠によき蛇の棲家である。樹丈は精々二米程、というの周囲の畑へ蔭を落すので、四五本の太幹を三年目程で切断するからで、切る頃には何十本もの林が密生して見透しもない大盆栽的偉観を呈し、天神森の榎塚として今まで村人の目に親しまれて来た一つの史蹟である。この太榎も二代目で、と

いうのは榎切りについては恐るべき固縁話を伝えていからで星野家に於て枝切りの際は、必ず社宮の清め抜いか、寺僧の養誼徑を例として一度でも欠かす事は無い。敢えて野生木一本を切るに此の供養、迷信という外はあり得ない。迷信の依りて来る由来を知れば如何な無信論者と雖も進んで斧鋸を加えることは出来な

い。明治の初年、頼まれて両毛氏先々代頃、榎を根元から切り倒したそうである所がその月の内に家内中が疫病に罹り、死者を出さずには済んだが、他には一軒として病災は無かった。不思議に思つて或る占いや、他分巫女だろう占つてもらった所。「巽の方位の古木を切つたらう。あそこは数人の靈魂が迷っている所である。土足で踏み荒らし、靈気を散じている木を切つたからその崇りで家中の者が病氣になったのだ」との御託宣であった。斯くて同家は毎年お盆会の日には香華を手向け線香を捧げて供養を続けて来たもの。戦後は廃止している。その事を知らず自分の家

で切つた時も怪叙をしたり病んだりで前の御託宣が判つて斯くては枝切りの供養となつたのである。近年この塚の由来を解くべく小野田浅吉君等、数回に亘つて探索土堀り迄して見たが、墓らしい石も五輪塔の一個らしいものもないので、お託宣は根拠ないもの、両毛、星野の怪我病災は偶然の一致、と断せざるを得ないで今日に及んだのである

がこの迷信に信憑性を持たせた有力な古老の話し伝えがあり、「崇りの榎塚」論は消滅することが出来なかつた。

その頃の飯泉は小田原城の最前衛線堀川の外にあり、現在の如く住民部落以外は一面の水田化したのは近年のこと、天神森地域は高依凸凹、松杉の大樹、雑木林もあり、退却兵への追撃戦も行われた原野に等しかった場所である。この天神森の所有者山口芳三家には今に此所から切つた松で作つた搗臼さえある。この追撃戦で死んだ上杉軍兵の死骸を、村人が集めて葬つたのがこの塚で前の榎は畑にならずに残つたものである。というのが語り伝へられた話であり、その様な原因で墓石らしきものも建てなかつたのだといわれる。

今飯泉の部落東辺に立つて黙々と足柄梨園を置いた見渡す限り平坦地となつた水田地帯を望観する眼には、永祿天正時代の地形推測は不可能である。然し古老からの説伝を或は事実談だと考えさせる証拠物が出たのは四年程前のことである。

崇りの榎塚から東へ百米位が天神森（明治末期小祠は無くなり本尊菅原道実公の木坐像は山口家床の間に安置さる）でこの方が土盛

りは高く二米近く変形の鶺鴒がらみ樹があり昔しを語り気に見える。この二点の中央から北へ三角点頂辺にある水田から、小野田武君が牛型の折敷見た古刀の一部(刀身がツバに止める鍔位厚さ二程程で一部磨減するも片面の十八金中陰の鬼馬家紋は実に馬上の兜将を思はずに充分)と素焼きの皿を持参して呉れたので小泉吉之助君に保管して貰

つてある。腐敗した武器、刀槍、よい、甲等も有ったであろうと思うが水田開墾の折土中に散埋して仕舞ったと思われる。

此の疑問多き塚が梶道敷下に埋って消滅する悲運の日を迎えたと聞いた我々史談会員は黙視看過する訳にはいかない。早速我が会長鈴木市長にこれが解明の配慮を懇請、中野社会教育課長にも同文を届けたのが三月二十一日、幾何もなく中野課長興水主事其の他での現地視察が行われたが時既に遅く、塚は殆ん原形を止めず、覆も伐採されて手の施し様もなく、僅かに出土石(大体十七八種に十二三種厚味五六種の偏円石で

酒匂川の流下石ではない。恐らく曾我丘陵山塊に普舎されていく波削石であろう(二、三を持ち帰られたに止まったのである。その後小野田君も自分も時々塚址に行き、畑に葉盛られた土山を採って遂に同形の石十五個を採取、星野家でも二三個取り来って自家の墓に供えている。最後の採取の時意外にも裏底に木の葉紋様のある径六、座高二、三種の一部欠損の素焼皿を発見したのであるが、門外漢の悲しさ、この皿と推定四、五十個の曾我山丸石と、覆塚との関係を繋ぎ合せることは至難である。が工事中を見つけた近くの矢沢清平家族の話では、人骨らしきものもあったし、丸石は盛土表面から二米位の地下に一面に敷き並べてあったとのことである。

出来るとのことであった。武君水田の油皿と併せて考えれば、この素焼品は四十八瀬川から鞠子川流と、丹沢西麓を流う酒匂川流の洪水に際して流下した古酒匂湾沿岸に先住した渡来民族の遺物であって、覆塚とは何等無縁のものと思われる。そうすると出土の丸石四、五十個が問題を新たに提起する。

飯泉地域の造塚には当然酒匂川の石で充分事足りると思われ、何是態々曾我山の石を運んで敷き詰めたか。さりとて先住民の住居址とは思われないばかりか、人の住みつくようになったのは大化の改新(千三百二十年前)前後時代より遡り得ないだろうし、飯泉郷の名が初見されるのは漸く鎌倉時代の内寛寺仏日庵文書の、

五月二十九日の小田原史談会第十周年総会出席の際石小皿を持参、中野課長及び立木望隆幻庵草舎主人に鑑定を乞うた処、弥生式土器で油皿だったのが後でその広縁を石で平磨したものではないか、且つ外側に刷目があれば後期弥生土器と断定

日

武蔵守平朝臣長時 (華押)

相模守平朝臣長政村 (華押)

飯泉地域の造塚には当然酒匂川の石で充分事足りると思われ、何是態々曾我山の石を運んで敷き詰めたか。さりとて先住民の住居址とは思われないばかりか、人の住みつくようになったのは大化の改新(千三百二十年前)前後時代より遡り得ないだろうし、飯泉郷の名が初見されるのは漸く鎌倉時代の内寛寺仏日庵文書の、

早以飯泉左衛門尉晃光法師領地。相模国成田庄飯泉郷内。田肆町参段口式所坪付名字載讓狀事。右任亡父右衛門尉平晃光法印法名光仏。正嘉三年四月九日讓狀。可令領掌之。細載之。可令領掌之。依仰口如斯。 文応元年九月十九

たのである。

曾我兄弟の仇討ちで有名な富士の巻狩りに六本松から成田、桑原の酒匂川を渡った源頼朝四十五歳の頃の飯泉は、漸くして数戸の開拓農家(開創七軒百姓の伝承あり、調査中にして、其中間報告をまとめる予定)が住み込んだ位と思へるので、先住民の住居址説も、古噴論も成立しない訳である。

於御屋形(名宛考)御元服。被歛恩召。相州之内飯泉小泉御分地之御事、希有之至。重々賀奉存候為御祝儀如斯御座候 以上

五月九日 土岐左□□ 上杉京亮様 であり寡聞にして古字小泉を知らないが、明治維新の際新たに称した丹花前(小泉家尊崇の薬師如来祭地から武田信玄北条攻めの際の戦死軍兵を合葬したという。覆塚と同面の「崇り田」如意輪観音堂地に赤い花の咲く大樹あり、その前を総称したものに)に吸取されたものと祭せられる。従って文応元年(一二六〇)の今から四百三十五年前前には僅かに四町三段余の農耕地しか無かった小農村であつたのである。

飯泉地域の造塚には当然酒匂川の石で充分事足りると思われ、何是態々曾我山の石を運んで敷き詰めたか。さりとて先住民の住居址とは思われないばかりか、人の住みつくようになったのは大化の改新(千三百二十年前)前後時代より遡り得ないだろうし、飯泉郷の名が初見されるのは漸く鎌倉時代の内寛寺仏日庵文書の、

我がも協力して煙燻奉仕の地に、史碑建立の議あり、片倉俊男会友が幸に自治会長でもあつて、工事者に交渉して疫棄される旧道石橋譲受けも纏り、礎を見て地内に散存する遺址、史蹟、伝説、口碑地、或は名樹址消え行く小字地等に、順次建碑の予定であり運営委員各位の賛同をも得つゝある

小田原昔ばなし

小林 泰助 私が初めて小田原を見物に来たのは、大正二年の秋頃であつた。

汽車は無論国府津迄である。今駅前には相仙と云う待合茶屋があつて、汽車に待合せの為休んだり、中食を取る人が多くて繁昌した。新築出来たでてて人があつた。其の時分は国府津は新しい遊び場として、東京から相当出掛けた。

電車は国府津より小田原を通過して、箱根湯本迄通じていた。馬車もあつたが新宿で止つた。電車に乗れば酒匂の松並木は今の通りであるが、今所には松濶園と云う高級旅館があつて相当賑つた。新宿に小さな新聞

文

推考が許されるならば、前記永祿上杉軍の数敗死者を合葬した地域が入瘞者の祀つた山王権現祠の境内であり、山王社を祭つた農家

小田原昔ばなし 小林 泰助 我がも協力して煙燻奉仕の地に、史碑建立の議あり、片倉俊男会友が幸に自治会長でもあつて、工事者に交渉して疫棄される旧道石橋譲受けも纏り、礎を見て地内に散存する遺址、史蹟、伝説、口碑地、或は名樹址消え行く小字地等に、順次建碑の予定であり運営委員各位の賛同をも得つゝある

我がも協力して煙燻奉仕の地に、史碑建立の議あり、片倉俊男会友が幸に自治会長でもあつて、工事者に交渉して疫棄される旧道石橋譲受けも纏り、礎を見て地内に散存する遺址、史蹟、伝説、口碑地、或は名樹址消え行く小字地等に、順次建碑の予定であり運営委員各位の賛同をも得つゝある

我がも協力して煙燻奉仕の地に、史碑建立の議あり、片倉俊男会友が幸に自治会長でもあつて、工事者に交渉して疫棄される旧道石橋譲受けも纏り、礎を見て地内に散存する遺址、史蹟、伝説、口碑地、或は名樹址消え行く小字地等に、順次建碑の予定であり運営委員各位の賛同をも得つゝある

の発行所があり、豆相新聞社であったが、掲示板を立見したのを覚えていた。

青物町では内野呉服店と丸九呉服店が両角にあり、商を競っていた。当時の台宿の通りは、尾張屋呉服店もあって、小田原では一番よい商店街であった。それに古着屋さんが沢山あった

小田原町へ来て、一番印象的だったのは、箱根連山である。山は格度晴天の日で、双子山は青々として、手に取る様に間近に見えた

余り山に親しみのない、見開の狭い青年である私は、その偉大なる箱根連山の山容に接して吃驚した。小田原は、さすがに天下の險を

押える良い処だと思つた。それに町中を流れている水の奇麗なるのは、これ又初めてなので驚いた。東京方面の平凡な田畑許りしか

知らない者には、山水が美しいので非常に好印象を受けた。早川口から軽便鉄道と云う、玩具の様な小さな汽車が頭の大きい煙突から黒い煙をもうももうと吐きなら、のろのろと走っているのも奇観であった。

それから間もなく小田原に住み付く様になった。追

青年期に達して、花柳界にも顔を出す様になったが、当時獅大匠として、豪勢を誇った漁業家があり、正月には土地の芸者百人以上に全部約束をつけて、総揚げしたと云う勇士もいた。当時若い男子の羨望の的であった。もはや格度五十年の昔だが、思考はその頃の吞

気さほうその様である。今の人は遊び方も全然違ふ屋間から四疊半で、湯のたぎる音を聞き乍ら、爪弾ききで一杯やると云う、のんびりしたものであつた。

その後大正九年頃、選挙で珍談があつた。或る大きな料亭の御主人が、町会議員の候補者に立ち、商売も盛んだったので、応援の運動員も大いに集まり、毎日四、五十名は出入し、御手ものだから、酒だ料理だとして派手にやっていた

この分なら運動員の投票だけでも十分出られるし、あわよくば最高当選間違なしと、ひそかに、ほくそ笑んでいた。尻を明けて見たら、意外や意外、僅か七、八票より入らず、最底で見事落選した。その御主人も世の人情の紙より薄いことを悟つたらしく、その運動

員達の顔を見たら、無面白かつたろうと思ひ出される。こんな話も、如何にも大層な、当城下町らしい、昔

徳川の幕藩体制も崩れて世は明治の文明開化の世となりませう。週れば鎌倉の時代、小早川弥太郎遠平が小田原に居館を築いてより幾星霜、最後は大久保家十一万五千石の領地より解散せられて近代明治の国造りが始まるわけです。

明治初期の井細田村は神社一、寺三、家数は百二十四戸で五百七十三人と記録してあります。職業に見ると農業四十三軒荒物商四軒米穀商五軒豆腐商一軒医業砂糖商一軒大工三軒酒商三軒質屋一軒綿屋一軒菓子商一軒油屋一軒足袋屋二軒鍛冶屋五軒材木商一軒建具屋二軒紺屋二軒セモノ商一軒樽物師一軒桶屋二軒造衣屋一軒縫屋一軒桶袋屋三軒士族二軒職業別の記録のない世帯二十六軒となつておりませう。氏別に見ますと石川氏十一軒野野氏鈴木氏

いさいだ記

星野喜久雄

懐しいエピソードである。(東京作家クラブ廿七日会員)

各七軒中戸川氏六軒瀬戸氏五軒府川氏美濃島氏各四軒狩野窪氏中川氏山口氏和田氏井上氏下田氏各三軒大川氏竹松氏石塚氏古川氏諸星氏米谷氏鏡部氏川瀬氏高橋氏各二軒杉山氏山崎氏小川氏渡辺氏小泉氏荻田氏杉本氏清水氏宮内氏栢沼氏井出氏田代氏勝俣氏大角氏杉山氏松尾氏小竹氏加藤氏下田氏高田氏若林氏田坂氏吉田氏鳥越氏喜多氏湯川氏磯川氏中川氏各一軒とあります

柴枯百年明治御維新当時土着した各家で現存する各家はどの位ありますか。人の一代が五十年目に変ると聞きませう。当時建造る世世稲荷社前の石鳥居に明治十二年大川茂助氏寄進銘があります。井細田の地蔵様の入口にある巨石に南無阿弥陀仏と刻石せられた

石塔は今見ても立派なもので、これは井細田念仏宗の助力で明治十三年に建碑せられたものです。板橋の地蔵様と並んで井細田の地蔵様は近在に人気があります。青野屋では近村から義務教育等終えた子供達が年期仕事に徒弟奉公に来て菓子製造の仕事をし、出来上った菓子を菓子箱に入れて久野の各部落にてんびん棒でかついで、卸に出掛け舟原から荻窪まで歩かため私の肩の肉がもろあがって、親達も笑いました。らく

と聞いています。明治十二年に東海道線が御殿場廻りで開通され、その後、国府津・熱海線が出来て、今井、町田、井細田の境目を通るために人工的に盛土をした上を汽車が走るのでながめはさえぎられました。明治は幕藩体制から近代国家への脱皮で四十五年間、明治天皇御一代の間に内戦・外戦ともに多事多難、政治・経済・文化・軍事と大革新のときで、変り身が早なればならない。大正時代に入りませうと紡績工場の出現となります。大正九年小田原紡績会社が井細田の

「イノシシ」「キツネ」が出没した話。久野川に「カワウソ」のいた話も聞きませう。ハダノの白笹稲荷さまには曾我山を越えて初午には出かけたそうす。初午には今でも白笹稲荷さまに祖父につれられていった思い出があるので行きませう。箱根双子山は井細田の持分でしたが今でいう生産性がないということで酒匂の網元川辺氏が買いとられたと言ふことです。井細田は米屋さんの多い所で、小田原の米相場は井細田で立つと聞いています。明治十二年に東海道線が御殿場廻りで開通され、その後、国府津・熱海線が出来て、今井、町田、井細田の境目を通るために人工的に盛土をした上を汽車が走るのでながめはさえぎられました。明治は幕藩体制から近代国家への脱皮で四十五年間、明治天皇御一代の間に内戦・外戦ともに多事多難、政治・経済・文化・軍事と大革新のときで、変り身が早なればならない。大正時代に入りませうと紡績工場の出現となります。大正九年小田原紡績会社が井細田の

無阿弥陀仏と刻石せられた

片町反対側で拾壱町歩の田
地がつぶれ、三万三千坪の
工場用地は作られ、赤レン
ガの工場は建築され、巨大
な煙突からはきだされる黒
煙は住民の眼をうばったこ
とでしょう。従業員三千名
という数字は、現在から、
考えても巨大産業といえま
す。工場の創業に当って星
野も工場に田地を売りまし
た。井細田の商家が増え、
町造りが進んだのは、小田
紡三千名の購買力です。工
場従業員の寄宿舎が建つと
ともに貸家も建ちはじめま
す。電話もひける。町中が
にぎやかになってきたこと
と思います。青野屋の話に
アンペラ入り砂糖二十四貫
俵が「あめ玉、鉄砲玉」に
して一日で売切れるという
ことです。従業員は近在は
もとより、新潟県富山県の
方よりこられたそうです。
そんな頃、突然やってきた
のが大正十二年九月一日正
午の関東大地震です。震災
は一瞬の間に小田原紡績工
場を崩壊してしまい、死者
犠牲者数百名という惨状で
エントツは中途より倒れ、
無残な姿となってしまいま
した。当時を回顧して工場
の建築は赤レンガの建築で

あったためか、現東京駅を
相像して下さいといわれま
した。レンガ建築は当時と
しては、ハイカラな建築だ
ったのでしようが地震には
勝てなかった。そればかり
でいると工場は復興するこ
とは出来ずそのままで終末
です。星野も地震によって
大損害をうけました。石倉
・貸家・稲荷社、は全潰。
店舗住宅は半潰、日記に生
命の保証があつてなにより
とあります。正運寺様門前
の石碑に、関東大震災に寺
は災にあつても寺宝大黒天さ
まの御加護により寺宝類は
持出され、小難にすんだと
刻石してあります。八幡神
社拝殿前の唐土台石に、大
正五年惣次郎妻石川ひさ子
寄進とあります。大正十二
年に手水鉢が設置されてお
ります。関東大震災で埋設
した井細田八幡神社前を迂
廻する久野川を直線化して
水利出水の利益を図った改
修工事は立派な工事です。最
近当時の功労者の顕徳碑が
久野川河畔に立てられまし
た。当時植樹された久野川
の桜並木は生長し現在小田
原名勝記に記載せられてい
ますがあまり土地の人には
知られておりません。震災

で倒壊した八幡神社の新築
が行われ、社殿裏の台石に
大正十四年九月新築石川彦
兵衛中戸川熊太郎星野善三
郎瀬戸友次郎中戸川靖一仲
手川兼吉陌沼寅次郎鈴木助
次郎石川助次郎大工加藤慶
次郎石工竹松平七と刻石し
てあります。井細田の表通
りを人力車で行くのを覚え
ております。五年目ごとに
行われる国勢調査の第一回
目は大正九年に始めたとい
うことです。大正時代は第
一次世界大戦があります。

戦場がヨーロッパのことで
すので、国内では対岸の火
災視してたことでしょう。
昭和に入りますと私の子供
の時です。遊びにいった糸屋
さんの家が印象的です。中
二階の家でハンゴ段がとり
はずせる仕組になっており
ました。店舗は上げ板戸で
店の前に縁側があげさげ出
来るようになっていたので
縁側でよく遊びました。裏
庭の片側に大きなモチの木
がありモウソウ竹が植樹さ
れていて、タケノ子堀りを
やりました。井戸があつて
床の間のなげしには弓がか
けてあり、書籍が本箱に入
れられてありました。

遊び場でした。一面の草原
となり、草むらの中で「バ
ツタ」を追いかけたもので
す。つぶれた稲荷は昼間で
も物淋しい所で、子供連の
試担会で夜間稲荷社を廻っ
てこいというのが、おさだ
まりです。「さいの神さま
」「サイトバライ」の正月
の門松を子供達があつめて
小屋をつくり、門松焼きを
やるには、うつつけの場
所です。門松もすたれてし
まいました。五月のタコあ
げにも良い場所です。夏
休み水泳という。酒匂川
に行くのですが、小田紡跡
より土堤まで川原田で小川
があり、魚をとりによく行
きました。「イナゴ取り」
もやりました。工場跡は、
ポプラの木があり、小田紡
の池もあり、泳いだり、魚

釣りなどしました。最近富
士フィルム工場内に商用で
入り、樹木の大きくなった
こと、特に今井へ流れる河
畔にあった柳の木の大きく
なったことにはおどろきま
す。井細田も通りの川を
埋めて新川におとし、魚彦
さんの裏の田を埋立て、北
の窪の住宅地、幼稚園前の
新道を作り、少しずつ交っ
て行きました。

八幡神社の再建時の寄附者
連名簿が八幡神社側面に掲
額せられておりますが、世
帯四百世帯で、昭和七年の
壹百円以上の、高額寄附者
名に、石川助次郎、中戸川
靖一、大川鶴吉、劍生時蔵
、石川彦兵衛、早野元光、
中戸川大助、古川晋次郎、
鈴木新蔵、鈴木助次郎、木
村源三、大川彦次郎、瀬戸
友次郎、石川伊兵衛、星野
善三郎、安間幸太郎とあり
ます。神社境内には石塚塚
天先生の短歌の建碑があり
ます。「神仙の心に通ふ誠
もて、世を渡りなば楽しか
らまし、安らげく生存へる
うれしさよ、神を敬ひ人を
愛さむ」

も遠近に十五軒、入口の
「生身魂」には親方達が集
まり、面白うございました
飯泉親吉当日の時には近辺
の親方達は集まり「ひめこ
饅頭」を加勢して作り、楽
しみました。当時の印物に
は相州小田原井細田とか、
井細田片町などとか書いて
ありました。相州という言
葉は昭和初期まで使用され
ていたものです。

店頭、屋根上に大きな天狗
せんべいのブルキ製の模型
があげられ、店内には、ら
くがん型、打物型、せんべ
い型、ぎっしりと並べられ
てありました。

井細田村、二川村、足柄村
足柄町と順々に大きな単位
になってきます。大雄山線
小田急線、関本行、松田行
下會我行バスが開通してき
ました。昭和十四年、久し
く空地化していた小田紡跡
も、富士フィルム小田原工
場の出現で再び曙光をあび
ることになります。引き続
いてユアサ蓄電池工場創業
になります。当時星野では
醬油、味噌、梅干、などは
自家製でした。暑中休暇で
東京の親類に行く時、ソノ
の葉でまいたツブの大きな
梅干を樽につめて、土産に

の葉でまいたツブの大きな
梅干を樽につめて、土産に

持たせられ、先方で「小田原の梅干」だと貴重品扱いされたものです。子供の時は砂糖をつけてたべました酒匂川のアユも夏場釣れたのを乾燥させてワラで連にして、お正月鰯類へくばり

ました。妙法講中の万燈を捧げて今井本光寺さまへ道中する時などついて行きました。井細田の片法華とい

って法華宗の多い所と聞いてます。念仏講中の人連の正月、八月の地藏尊日に夜おそくまでの御詠歌鉦の音声が今でも聞えてくるよう

うです。残念なことに関き損じましたが、井細田の地藏尊が別名「ハナドリ地藏」といわれる由来が御詠歌

によみこまれ、伝唱されてきたそうです。伝説は井細田の石川家で、地藏尊裏の田を耕作していた時、用事

があつて、馬をそのままにして、自宅に帰り、用事を終えて田圃にきて見ると、田圃がすっかり耕作されて

いた。誰がやったのかわからない。不思議なことがあるものだ

と合点がいった。有難いものだ、御詠歌に読みこまれたそうです。

井細田表通りの河畔府川万右エ門さま宅前の藤棚がきれいでした。今地藏尊境内

にあります。八幡神社の奉納角力も相模風土記に出て

いる所をみると、天保時代からもう始まっていたものでしょう。最近の記に小田

原桐座桐大蔵の墓碑が井細田長安寺様墓域にあること

がわかり、小田原市文化財に指定され墓碑の拓本展に展示されておりました。

大東亜戦争は井細田にも空襲被害をもたらした。戦後

おのころともかな

信火燃内行煙漲外、仏弟子井細田の音楽隊の楽器は先生

の寄附金によるものが多かったと聞いています。井細田公民館の落成にあ

つて記念として館内に掲額せられた頌徳記によりま

す、この公民館ができたのは、大正天皇御即位記念事

業として当時の村の有力者石川彦兵衛翁等識者の首眼

によって箱根外輪山彦百町歩の植林事業をおこし、その

果実が現今の公民館建築資金になったもので、地域

住民に負担をかけずに出来たものであると扱ばせられて

います。先人の功徳によって後世恩恵された教訓と思

います。地域史談会では、この公民館落成記念事業として、池

上、多古、井細田三地域の旧家の協力を願って、宝蔵

せられていた古文書物件を一堂に集め、地域社会の文化

の面影を求め先人の地域住民に残された教訓を学び

して井細田を通過をし、スマートな姿を見せます。

井細田は昔七軒百姓といわれてきました。徳川天保で

九十九戸明治御維新で百三拾戸昭和初期で四百戸昭和

三十七年で八百拾戸今は千軒を越えるかもしれませ

ん小田原城下の鐘の音は井細田でも聞えます。御天守も

夜間照明に映えて美しく見えます。井細田の道路は、

今でもカギ形です。昔から見れば良くなったという、

俳借寺一茶に就いて

杉山康輔

私が所蔵している軸に小林一茶の一幅がある。足立一恵の家人鮎かぬ世のうれしきには一雪の

装着てまいるべきよしの一茶の賀庭を申しふれられければ河豚くわぬ菌なみや

八十のおとしなみ文化なつとという志為足立金令舎 一茶

文化七年と云うとしは一茶が生涯のうち数々の出来事

茶がひねった一句であろう長寿を得てもわが身を大

切にする老人の健かな姿が彷彿として浮んでいる。

文化七年五月一茶は生れ故郷信州上水内郡柏原駅を

訪ねた。これは江戸に出てから初めて訪れであった

現在の上下内郡信濃町である。この時父弥五兵衛は

九十九の歳月が流れてい

る。文化七年五月十日江戸を発ち二十日に柏原に着

が継母や異母弟の眼は冷た

かった。一茶は踵を返して

その夜は若月太輔の家に一夜の宿を乞ひ早随父の墓

を済ませ十里の山坂を引返し倉井村の溪宿に一夜

を明かし六月一日に江戸に還ったがこの時の句に

古郷や

よるもさわるも茨の花と嘆じている。

短歌に

雪ふかく
かはり床しく咲く梅の
清きを

年七十二如夢

昨是今非又何詰
人生福福似四運
万里清風只自知

為足立金令舎

文化七年と云うとしは一茶が生涯のうち数々の出来事

長野県信濃町一茶記念館

長中村貫一氏の書信参酌

古郷や

よるもさわるも茨の花と嘆じている。

十二日の江戸発足十八日柏原に着いたが途中炎暑焼くが如く行路一步も進まずとまで記されている。中村観国なる人の家に滞留して八月十二日柏原を発ち十八日江戸に着いている。二度目は十一月十七日江戸を発ち廿四日柏原に到着、丘右衛門と云う人の家に寄宿して年を越している。彼は安永六年十四才の時郷里を出てから文化九年の今日まで漂泊三十六年日数に換算して一万五千九百六十日だと嘆息している。七番日記参照

一茶同好会東松露香氏の俳借寺一茶を参酌すると一茶は幼名信之俗称弥太郎と云う。農家弥五兵衛の長男として宝曆十三年信濃国上水内郡柏原駅に生まれた。三歳の時実母に死別し幼時から父と子の寂しい家庭に育ったので母恋しさは一入で心の寂しさは隠しようもなかった。

我と来て遊べや親のない雀
一茶六才の時の作と謂う母性愛に餓えた童心の単的な卒直な表現である。験の熱くなる想いがする。
一茶は郷里に在るとき柏原駅本陣中村六左衛門に就いて学問を授けられ更に又六左衛門方にいた老人から俳借の手ほどきを享けたと謂われる。

八才の時継母が来て十才の時異母弟専六が生まれてから継母の虐待を受け家庭に風波が絶えないので十四才の時父は彼を江戸に送った。
その後の十年間の消息は詳かでないが江戸に出た一茶が二十五才の天明七年葛飾派の二六庵竹阿の門に入り寛政二年一茶二十八才の時竹阿歿してその庵をつぎ二六庵菊明と号して判者の地位についたが規矩にこだわらない一茶は葛飾派と和せず、寛政四年一茶三十才の時葛飾派を去って自ら俳借寺一茶と号し西国行脚を志した。この頃から一茶の名は漸く江戸に拡がり俳人としての地位を確保した。

一茶は晩年に至って妻帯したがそれから一生に三度も結婚をしている。最初の妻帯は一茶五十二才の文化十一年四月十一日、郷里の赤川村から常田きくと云う当時二十八才の若妻を迎えた。こゝに漸く心の安らぎを見出した一茶は江戸の

俳壇を去って郷里に帰る決心をした。同年十二月廿四日故郷に着いた一茶は是れがまあ終の栖か雪五尺と詠っている。それから菊女との間に長男混蔵二男千太郎長女さと三男石太郎四男金三郎と次ぎ次ぎに子女を儲けた。五月生れの長女さとが二才となった元旦に一人前の雑煮膳を握えさせ這へ笑へ。

二つになるぞけさからはと詠っている一茶の満足した幸福そうな家庭の姿が忍ばれる。五十七才の春を迎えた文政二年の元旦にうそ寒や親と云ふ字を知ってからと詠っている。そしてそのともかくも、あなた任せの年のくれと詠っている。

こうした平盤な幸福も永くは続かなかった。子供達は何れも病致し愛妻の菊女も一茶が六十一才の文政六年に亡くなってしまった。一茶の落胆想うべし、翌年飯山から雪女と云う女を娶ったが藩士の娘で永続させず離婚して終った。一茶六十二才の文政七年のことである。更に六十三才の文政八年にやをと云う女を娶った。それから二年経た文政十年十一月十九日に一茶は

六十五才を一期と仮住居の土蔵の中で生涯を閉じた。やを女は翌年一女やたを産んで居る。そして生涯一茶につらく当たった継母も一茶が歿した翌年他界した。

一茶は生涯を通じて心の安宅がなかった。後から後から押し寄せる荒波に揉まれ揉まれた苦難の一生であった。が謂うならく強いて幸福な時期を探索するならば五十二才の文化十一年を頂点として六十才の文政五年までの八、九年間であつたらうか。彼は人生苦とたゝかい乍らよく道を切り開いて行った。しかも人間愛に徹した洞察力で明るく明るく観察している。

やれうつな
岬が手をする足を
お馬が通る
鹿の親
笹吹く風に戻りけり
うぜんとして
山を見る蛙かな
等は余りにも知られた名句である。俳壇の一茶は短歌の啄木とならべて一脈の共通した点があるように思われる。それは余りにも庶民的であり余りにも人間的な存在だったからである。
昭和四〇、九、三〇 脱稿
一茶研究の主な参考書として次の資料がある。
一茶同好会東松露香氏の俳借寺一茶
一茶七番日記八番日記九番日記
一茶伝記 おらが春

昭和四十年年度豆相史談会役員

会長	遠藤安太郎	会計監査	田中誠一
副会長	関野惣平	相談役	松坂康
	井上英一		峰堅雅
	長倉慶昌		原勝治
専務理事	加藤誠夫		
常務理事	戸羽山かん		
	沼上二郎		
	立木望隆		
	中野敬次郎		
理事	清水專吉郎	常任理事	輿水正光
	内田武雄	理事	小沢寛一
	東海俊美		後藤浅義
	杉崎正五		神保圭介
	柳本庄平		田中誠一
	柳川鼎		養田長平
	安藤初麿		
會計	齊藤藤三		

(以上五十音順敬称略)

豆相史談会史蹟めぐり

昭和四十年七月十日十一日
清水 専 吉 郎
伊豆相模史談のつどい峯にいちど けふ
は道了山にたのしく
水すめる清左エ門の湧き泉 としうつり
きて山葵田いづこ
足柄の昔おもほゆ関本の ふるみちいま
しまた軒ならぶ
ようやくに昔のままの地藏堂 足柄峠こ
こにひかえて
その昔鎌倉道の矢倉沢 まなかひにしの
ぶ裏関所あと
内山に保福寺たづね地藏像 つぼなき葉
師まれに見るかな